

T.A ULTRAGUIZ
CROSS REVIEW
第6回～第11回
クロスレビュー
2015.11 執筆

ねおかず
ウルトラファンサイト管理人
ウルトラの美術セット好き

コアタイム
テレビマンユニオンをこよなく愛す、ウルトラしまんちゅ

いけがわ
マンガ研究家。ウルトラクイズはストーリー性やバックボーンを重視した視聴スタイル

テーブル
Yaneurabeya と言えばやっぱりテーブル。各大会のテーブルを「ねおかず」がレビュー。

**史上最大！第6回
アメリカ横断ウルトラクイズ**




1982年
10月7日/14日
/21日/28日放送

参加者
7332人

優勝賞品 視聴率
超短期間世界一周の旅 27.2%

**史上最大！第7回
アメリカ横断ウルトラクイズ**




1983年
10月20日/27日
11月3日/10日放送

参加者
10203人

優勝賞品 視聴率
カナダ産ログハウス用の丸太 34.5%

**史上最大！第8回
アメリカ横断ウルトラクイズ**



1984年
10月11日/18日
25日/11月1日放送

参加者
11408人

優勝賞品 視聴率
組み立て式クラシックカー 23.1%

**史上最大！第9回
アメリカ横断ウルトラクイズ**




1985年
10月24日/31日
11月7日/14日放送

参加者
11754人

優勝賞品 視聴率
潜水艦（要酸素ボンベ） 22.2%

**史上最大！第10回
アメリカ横断ウルトラクイズ**



1986年
10月30日
11月6日/13日
/20日放送

参加者
17162人

優勝賞品 視聴率
熱気球（南米直行？） 26.8%

**史上最大！第11回
アメリカ横断ウルトラクイズ**



1987年
11月5日/12日
/19日/26日放送

参加者
18017人

優勝賞品 視聴率
満潮になると沈む島 20.4%

「福留 VS 挑戦者の構図」がほぼ確立されたウルトラらしい大会。そして「効果音革命」が起きた日本クイズ番組史に残る重要な大会。ボタン押し、正解、不正解時の効果音が電子音となり、改良を重ねながら今でも様々なクイズシーンで使用されている。もはや文化伝承レベルである。

ウルトラクイズ殺人事件や双子神経衰弱、ケンタッキーダービーなど、クイズに工夫を感じている第6回。第5回に比べるとキャラの印象は薄いが見聴者はタイ系美人・今井さんを応援か。クイズの実力は高木さんが一番の様に見えたが、決勝はトドさんが制す。優勝賞品とスタジオ結婚式イイね。

多くのアクシデントに見舞われルートも短い第6回。全体的に工夫は見られるものの若干空回し感も。優勝賞品の世界一周ももっと活かされたはず。ニューオリンズはトメさんが映っていないだけでなく、初の人物当て形式もありカメラが全体的に不安定。スタッフの動揺が伺える。

「？」マークの白の縁取りが施された事となり、早押し時の音が一新されたのを受け、ウルトラクイズの様式美が一気に洗練された印象に様変わりしたの大きい。今大会独自のテーブル配置の面白い部分を挙げれば、ダラスの「宅急便早押しクイズ」。移動するトラック内で3列配置を行っている。

この大会は異質だ。その象徴が、早押しクイズ時、挑戦者は立ち状態且つ「テーブルの両脇を持った状態で問題を聞く」というものだ。結果としてボタン押しアクションが大きくなり、絵的に見栄えが増したが、その後採用されなかったのは、何か足りなかったということだろう。

岩瀬さんが超元気！挑戦者の面子がイイ感じで揃った回。ロサンゼルスでの挑戦者登場シーンは皆晴れやかな表情が◎！クイズヨットスクール&罰ゲーム、セントRのジョギングマシンには爆笑。オルバーニーでの金時真代ちゃんとの別れ、そしてエンディングの留さんのナレーションに心打たれる名作。

「ヨットスクール」あたりからトメさんの地の部分が出始める。高視聴率回だがこの回だけのキノコボタン制以外特筆すべき点が乏しい。テレビがカジュアルに世界を映す時代、「HOW マッチ」も別時間帯でスタート。第8回以降はゴールデン昇格した「HOW マッチ」との戦い。

司会者にも専用テーブルが使用されたようになり、福留氏の威厳度↑。この大会独自仕様として、テーブル両サイドに手を置く部分が拡張され、早押しボタンが大きい「キノコ型」になり、テーブルの中央に配置された。立ち状態でのクイズが多いが、「はかま」はあまり使用されない。やはり異質だ。

「大声」「マラソン」「海底早押し」等、クイズの産業革命が起こり、今後のウルトラの方向性が見えた状態での大会。クイズのエンターテインメント性が増した一方で、学生の参加者が増え、福留氏の描きたい「人間ドラマ」が演出しにくくなってきた。その結果、大会はクイズ形式に寄った印象。

道篤氏 orz はさておき、グアムの敗者たらいまわしクイズに大声クイズ、ジョギングクイズ等、インパクトが強いクイズ形式が揃う。中でも海底早押しクイズ！スーツケースも海底！「自分の汗を蒸留して水を作る」「北北西に進路」等、名作罰ゲームも。古賀ママにはもっと先へ行って欲しかったなあ。

若者が多く、垢抜けた感のある第8回。大声・マラソンと第2期定番クイズが産まれたのも大きい。視聴者の度肝を抜く海底クイズの説明で「泳げないなんて非国民」「酸素？アラ要りますね」と石川アナ絶好調。トメさんも「ザ・ガマン」はこの番組が生まれた番組です！

今大会でデザインがまとまり、以後最後の大会まで同じデザインが使用された。「？」マークの周囲に、☆マークが囲み、一気にデザインが引き締まった。テーブル色も紺色から強めの青色になり、明るく印象に。また海中で平然と設置されるなど、テーブルの耐久性や汎用性にも驚かされる。

決勝を「パリ」に設定したため、これまでのウルトラの常識を打ち破る内容。結果として、「運」の比重が高まり、番狂わせがとんでもなく多い。チェックポイント数も多く、豪華爛漫。若い参加者が多いが個性的なメンツで人間味あふれる大会となっている。優勝者もその両親も超個性的。

NYを超えてパリ決勝！ロングルート紹介は何度見てもイイ！成田では第3次予選にヤラレタ。NYのマラソンもいいけど、ロンドンの迷路パラマキに当時心ときめいた。堀さんの潜水艦見たかったなあ。そして当時応援していたスーツ姿の伊澤さん。ドーバーが通せんぼだったらパリへ行けたかも！

第9回は「運の回」。後楽園の敗者復活からドーバー横断まで、徹底した運要素にもかかわらず早押し問題も多い。良問が多く第9回の本は一般向けのクイズ大会で重宝する。バラエティー色も強く、2時間で5CP消化というベストな構成で楽しくよくまとまっている点を高評価。

とにかく「バラエティ豊か」なのだ。成田空港での敗者復活戦では「敗」「者」「復」「活」「戦」の文字をあしらった特性バージョン。ヨセミテ大声メーター、アトランティックシティのトランプカード設置、極めつけはフランス国旗色仕様テーブルを決勝の会場に使用するなど、テーブルに対する愛情が強い。

全てがカッコいい。コース終盤を秘密にし、南北2ルートに分けた驚きの展開。決勝の二人がNYで顔を合わせるシーンはクイズ番組の域を超え、ドラマも超え、ドキュメンタリーとして最高峰。挑戦者も個性溢れ、表情も美しく、クイズレベルも高い。これこそ歴代NO.1だろう。

巨大雲が晴れ二股ルートに！度肝。成田〇×機（贅沢！）、団体綱引き、念力、砂時計とアイデアも多彩。チチカカ湖の大道さん「成田でありがとうな」もグッと来る。決勝戦では巖流島の戦いを匂わせ、あえて森田さんを後ろから登場させる演出が堪らない。第24回ギャラクシー賞特別賞。白井審査委員長、優秀の美を飾る。

第10回は「体力の回」。後楽園のぶらさがり復活、腕相撲、綱引き、マラソンからパラマキまで体力系クイズ3連発など、過酷な南米コースを見据えて選ばれる厳しい戦い。分岐の隠しルートが明らかになったときの衝撃は忘れられない。ウルトラでは珍しい決勝の名勝負も良。

国内第1次予選でのMCテーブルデザイン変更。過去最大の設置数を誇ったシアトルでの22台は匠巻の一言だが、あまりに多すぎた為か、新たに作成されたテーブルは素材や側面の形が従来物と異なるもので、「デザインの一貫性」が弱い。チチカカ湖ではトローラ（小舟）に司会者テーブルを設置している。

国内予選がこれまでにないくらいに手間暇をかけており、「新たなウルトラ」をやりたいというスタッフ側の思いが伝わる。本土上陸後のクイズも新機軸のものが多く、やや地味な印象が拭えないのは、前大会があまりにも素晴らしかったためだろうか。若い挑戦者が多い事も要因か。

この回で敗者の味方の役目を終える徳光さん。名古屋ミニトラは置き土産？ COM 予想泣かせの温井さん、打倒西武！宇田川さんの罰ゲーム、謎の男・ミスターXの演出や松尾さんの登場シーンが好いだ。優勝賞品のオチはウルトラ歴代NO.1。パチンコ島が今も稲川さんの所有物だそうで素敵です。

準決勝の伏線となる後楽園のエキシビジョン、クイズ神社や「徳光さん引退興業」の名古屋ミニトラなど第一週の仕掛けが楽しい。定番クイズを前倒しして後半に意欲的な形式を持つてくる大胆な構成。また全体的にインパクトのある「絵」が多く、とても印象に残る回だ。

全体を通してあまりテーブルが使われていない大会ではあるが、見るべき所は多い。唯一、国内第2次予選でテーブルが使用された物は「ソレノイド早押し表示」がテーブルに固定された。レオモの準決勝ニュージャージーでは、松尾さんだけのために赤色のテーブル+はかまが使用された。

殿堂行き...3人のレビューの合計点数が27点以上になると「殿堂行き」としてファンの間で語られる